

調査研究事業

ウェブサイトを「読み物・連載

ピティナウェブサイトで作曲家・作品研究から国際コンクールレポートに至るまで多分野にわたる情報を様々な切り口で提供、集約しています。取材・文・菅野恵理子（研究会員）

教養としての音楽教育とは

11月9日（土）国立音楽大学にて『リレートーク』音楽大学と教養教育』が行われ、「音大生にとつての教養とは何か」の問題提起がなされた。主宰・久保田慶一教授による冒頭の問いかけに基づいてパネリスト

2名が発表。教育哲学の立場からドイツの教養教育例（京都大学准教授・山名淳氏）と、米コミュニティセンターのレジデンス・アーティスト活動体験（ヴィオラ奏者・大島路子氏）が披露された。後半は出席者20名によるリレートークへ。久元祐子先生（正会員）は25年前にレクチャーコンサートを始めたエピソード等を披露しながら、音楽の力や音楽で培ったコミュニケーション能



力を社会の中で役立てることが大事と述べられた。また筆者はアメリカの大学には音楽学科があり、リベラルアーツとしても学ばれていることを紹介した。

ここで「音楽における教養」を三段活用法的に考えてみたい。第一に音楽そのものが教養である、と捉えること。第二に、音楽を教養的に学ぶこと。美術・文学・歴史・教育などと関連させながら学ぶことで、自分や他人、世界を見る眼が熟成されていく。第三に、音楽を教養的に生かすこと。これからは音楽を創造・演奏する力に加え、音楽の価値をより広い世界に結びつけていく力が求められていると感じた。

開成中学校では全員がピアノを弾いている！

全国有数の進学校である開成の生徒は、授業でピアノを弾いている。しかも25年前から！今回現役生のお母様の熊谷麻里先生（正会員・後列右）のお力添えにより、校長の柳沢幸雄先生（前列右）、音楽専任の小鮎勝博先生（前列左）、中学教務委員長の渡辺信幸先生に取材させて頂いた。

演奏と創作を想定したカリキュラムは、第1回目からユニークだ。1年次には校歌を用い、その歌詞から学校創立の歴史や教育理念を学び、写譜を行って記譜法を学ぶ。さらに音階や和音の転回形などを

学び、コードネームを見て左手で和音やアルペジオの伴奏形を考えて弾けるようにする。2年次では自作曲の試験も。小さい頃からピアノを習っている子は、オリジナルティ溢れる曲を作つてくることもあるそうだ。高校ではさらに4つの専門コース（歌唱、ピアノ、ギター、作曲）から選択。作曲コースでは本格的な和声と創作の勉強を経て、

最後には「自由と規則、あるいはドビュッシー」で人生論にまで結びつくような創造の奥義が明かされる。

開成中の新入生のうち、40%はピアノ経験者だという。「開成に入ってからピアノを始めた子が、とても楽しくて好きになったという話をよく聞きます」と熊谷先生。音楽専任の小鮎先生は「生徒はもともと論理的な思考力があるので、音楽経験がなくても順序立てて説明すれば皆理解してくれます」と信頼を寄せる。小鮎先生が25年前に行つた授業内容の全面的見直しによつて、生徒たちも興味をもつて授業に取り組むようになったよ

うだ。誰もが分かち合える音楽の力や自ら人生を切り開いていく自主性。グローバル社会の中で必要とされる力が、開成の音楽教育の中でごく自然に培われている。

